



TITLE:

第4章 京都大学医学部構内AN20区 の発掘調査

AUTHOR(S):

五十川, 伸矢; 伊東, 隆夫

CITATION:

五十川, 伸矢 ...[et al]. 第4章 京都大学医学部構内AN20区の発掘調査. 京都大学構内遺跡調査研究年報 2000, 1996: 131-148

ISSUE DATE:

2000-08-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226719>

RIGHT:

第4章 京都大学医学部構内A N20区の発掘調査

五十川伸矢 *伊東隆夫

1 調査の経過

今回発掘調査を実施したA N20区は、京都市左京区吉田近衛町所在の京都大学医学部構内の東部に位置し、吉田山の北端から続く旧白川が形成した扇状地の末端部にあたる。西約600mには鴨川が流れ、その氾濫原にもほど近い（図版1-248）。この地に放射性同位元素総合センター教育訓練棟の新営が計画されたため、新営予定地の510m²を全面発掘することとなった。現地調査は1996年5月20日に開始し、8月14日に終了した。

A N20区内については、1981年度に試掘調査を実施し〔浜崎83a pp.43-45〕、本調査区の南に隣接する134地点で1983年に発掘調査をおこなっている〔五十川86〕。その結果、中世の井戸や不定形土坑などの遺構を検出し、井戸からは祭祀にかかわるとみられる遺物が大量に出土した。今回の調査では、134地点と同様に井戸、中世の土取りに関する遺構などを検出したが、さらにその下層において、先史時代の遺物包含層と流路を発見した。流路に埋積していた粘質土からは、木材や種子などの大量の自然遺物を採集し、河畔に繁茂していた植物相の一端をうかがうことができた。

なお、発掘調査は五十川と古賀秀策が担当し、中田敬子、曾根茂、菅野類、長尾玲が現地作業と出土遺物の整理を補助した。本章は、出土木材の樹種同定を伊東隆夫が、それ以外を五十川が執筆した。

2 層 位

周辺地域は、東から西へ、南から北へむかって緩やかに傾斜しているが、調査地点の東端から西端にいたる地表面は、近代以降の大規模な造成のためにほぼ平坦となっており、海拔51.6mをはかる。調査範囲のうち西北部に大きな攪乱があり、ここでは井戸のような掘形の深い遺構を除けば、遺構はほとんど残っていなかった。

まず、図73に示した先史時代から歴史時代にいたる全体の層位を上から順に説明する。最上層には厚さ約1mにもおよぶ表土（第1層）がある。その下には、近世～近代の水田の耕作土とみられる黒灰色土が部分的に残っていた。床土とみられるものがないため、当

*木質科学研究所

京都大学医学部構内A N20区の発掘調査

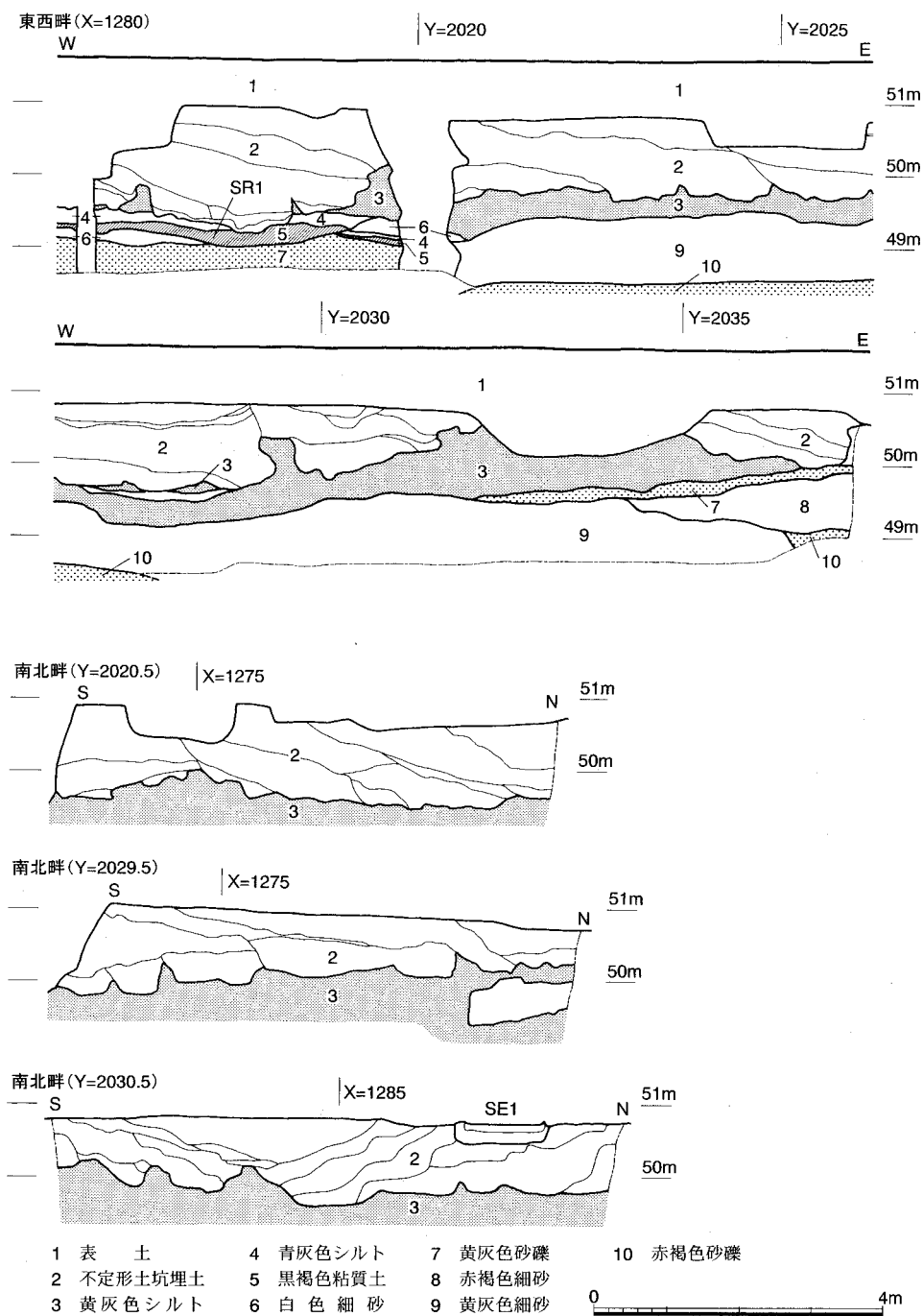


図73 調査区の層位 縮尺1/100

層 位

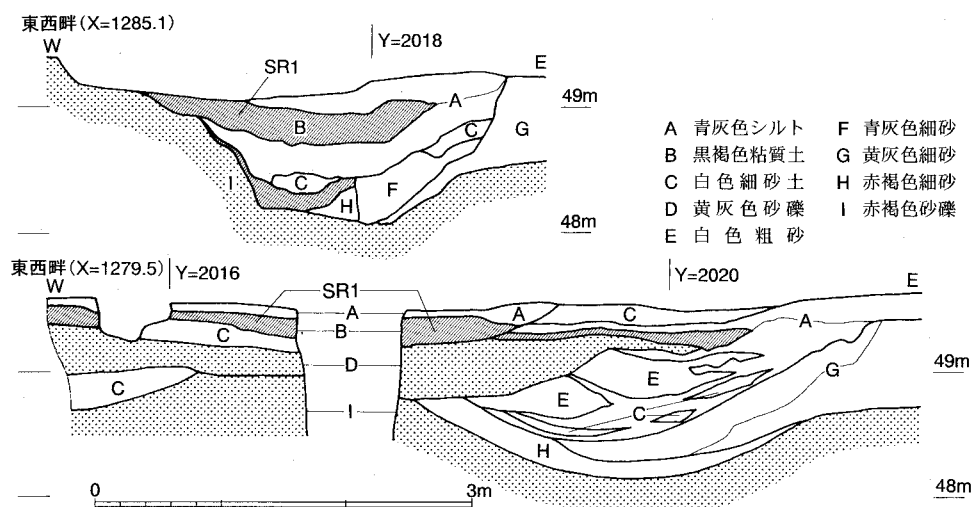


図74 先史時代の層位 縮尺1/60

時、調査区周辺は畑地がひろがっていたと推定できる。近世の黒灰色土の下には、茶褐色土、黒褐色土、黄色砂などが、モザイク状に堆積している。これらは、かつてほぼ水平に堆積していた各層が土取りのために掘削された後に、埋め戻された結果と考えられる。その掘削の単位は、形態が一定ではないため、これらの土坑を不定形土坑と呼び、その埋土を第2層として一括した。土取りの対象となったのは、黄灰色シルト（第3層）あるいは青灰色シルト（第4層・図74-A層）である。その下に、西域では黒褐色粘質土（第5層・同B層）、白色細砂（第6層）、黄灰色砂礫（第7層・同D層）、東域では赤褐色細砂（第8層）、黄灰色細砂（第9層）などを介して、赤褐色砂礫（第10層・同I層）が厚く堆積している。黒褐色粘質土の埋積する沢状の流路をSR1とする。これらのシルトや砂礫は、旧白川の氾濫によって形成された堆積物と推定される。

次に西域の先史時代の層位を図74に示して詳しく説明する。黄灰色シルトの下には、青灰色シルト（A層）、黒褐色粘質土（B層）のほかに、白色細砂土（C層）、黄灰色砂礫（D層）、白色粗砂（E層）、青灰色細砂（F層）、黄灰色細砂（G層）、赤褐色細砂（H層）などが薄い層をなして複雑に堆積している。流路SR1の段階以前から、ここに浅い沢状の凹部があり、そこへ様々な堆積物が流れ込んで沢を埋めていったとみられる。その下には厚い赤褐色砂礫（I層）が堆積しており、大規模な洪水を物語っている。青灰色シルトからは縄文前期の土器、黄灰色シルトからは縄文中期の土器が出土しており、その下に堆積する黒褐色粘質土は、縄文前期以前に堆積したものとみられる。

3 縄文・弥生時代の遺跡

(1) 先史時代の地形（図版38，図75）

前節で述べたように、黄灰色シルトより下位の先史時代の土層は、基本的に赤褐色砂礫という基盤の上に黄灰色細砂が厚く堆積しているのであるが、調査区の西域では、赤褐色砂礫が大きく落ち込んで、そこに青灰色シルト、黒褐色粘質土、白色細砂土、黄灰色砂礫などが薄く層状に重なりあっている。これは、浅い谷状の凹部が次第に埋積した過程を示している。凹地は南から北に傾斜しており、北流する小河川によって埋積がおこなわれたことがわかる。そして、黄灰色シルト、さらに弥生時代前期末～中期初頭ごろに黄色砂が堆積して、現在のような北東から南西に緩やかに傾斜する地形の基盤が形成され、縄文時代にみられた凹凸は、ほぼその姿を消してしまったのである。

調査区西域の黒褐色粘質土を除去した段階の地形測量図を図75に示した。流路SR1はX=1280付近で幅約4m、北にゆくにつれて広がり、緩やかな段をなして低くなってゆく。調査範囲内で南端は北端よりは約60cm程度高く、約3°傾斜があったことがわかる。周辺地域の調査で検出している流れは、ほぼ北東から南西にむかうものが多いため、SR1の

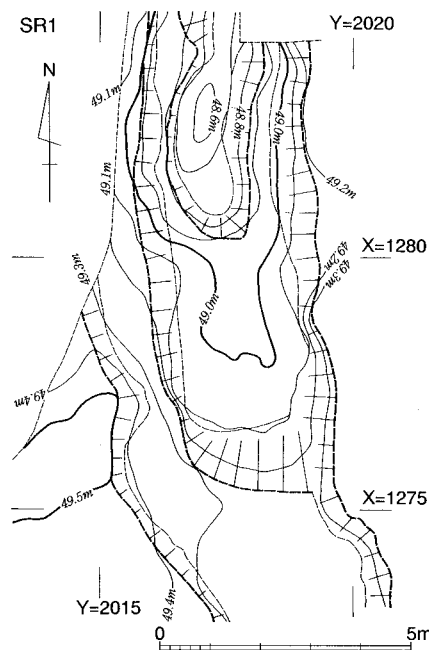


図75 先史時代の地形 縮尺1/150

周辺には、局地的ながらかなり複雑な凹凸があったとみるべきであろう。

また、X=1280以北の地域では、SR1に埋積している黒褐色粘質土のなかから大量の木質物が折り重なって出土した。これは流路の両側に繁茂していた木本草本が埋没したものであり、湿気と養分に富んだ河畔に形成された林の化石といってよい。ここには、木材のみならず樹木から落下したとみられる種実類も含まれていた。この黒褐色粘質土には、まったく遺物が含まれていなかったが、その上層の青灰色シルトから縄文前期の土器が出土しているため、それ以前のものと推定される。

(2) 縄文・弥生時代の遺物 (図76・77)

この時期の遺物は調査区の全域から発見されている。出土層位は第2層の不定形土坑埋土、第3層の黄灰色シルト、ならびに第4層の青灰色シルトの3層であり、その大半は第2層に集中している。この第2層は中世の土取りのため徹底的に掘り返されているため、遺物は原位置を保ってはいないが、遺物の出土地点は調査区を北東から南西へかけて斜めにはしる帯状に集中する傾向がうかがわれる。この分布状況とSR1の存在、土器片の摩滅の激しさ、さらに周辺地域に北東から南西へかけてのこの時期の流路が確認されていることなどを考え合わせると、第1層と第3層間のあるレベルに北東から南西へと流れる流路が存在し、遺物はこの河床に堆積していたものと考えられる。遺物は縄文後期のものと弥生前期のものが主体を占める。また第3層からは縄文中期の土器2点、第4層からは縄文前期の土器6点と石器(剥片)1点が層位的に出土している。出土遺物は総数263点であり、内訳は縄文土器と弥生土器がほぼ同数ずつと、縄文時代の石器1点である。これらのうち時期などを判定することのできる土器片を52点取り上げ、以下に説明を加える。

縄文前期の土器 (Ⅲ1～Ⅲ6・Ⅲ9～Ⅲ11) Ⅲ1～Ⅲ6は青灰色シルト、Ⅲ9～Ⅲ11は不定形土坑埋土からの出土である。Ⅲ1・Ⅲ2は縄文(LR)地に特殊突帯文を施す。北白川下層Ⅲ式。Ⅲ3～Ⅲ6・Ⅲ9・Ⅲ10はいずれも縄文(LR)を施す胴部の破片。Ⅲ9・Ⅲ10はⅢ3～Ⅲ6が発見された地点の直上に位置する不定形土坑の埋土からの出土である。この土坑の底面は青灰色シルト層まで至っており、その埋土にも青灰色シルト塊が含まれていた。それゆえ、胎土・縄文・調整などの共通点をも考慮に入れると、Ⅲ9・Ⅲ10は青灰色シルト出土のⅢ3～Ⅲ6と同一個体である可能性がある。

縄文中期の土器 (Ⅲ7・Ⅲ8・Ⅲ12・Ⅲ13) Ⅲ7・Ⅲ8は黄灰色シルト、Ⅲ12・Ⅲ13は不定形土坑埋土の出土。Ⅲ7・Ⅲ8は北白川C式の深鉢C類〔泉85〕の突起状山形口縁の一部。Ⅲ12は口縁部の破片。外面には長大な爪形文を施文後、口縁に平行して円形刺突を施す。内面には船元式に特徴的な右撚りの縄文を施す。船元I式。Ⅲ13は太い沈線文を施す北白川C式の土器片と考えられる。

以上で触れた遺物のうち、Ⅲ1～Ⅲ8ならびに石器1点は、すべてシルトからの出土である。しかし当調査区周辺のシルトからは遺物が発見されたことはなかった〔清水91〕。このシルトに関しては、当調査区の南に位置する154地点で火山ガラスを利用した堆積年代の測定がおこなわれており、シルト層最上部の堆積年代を約6300年前(縄文前期初頭)とする結果が出されている〔竹村・檀原88〕。今回シルトから出土した遺物は縄文前期末

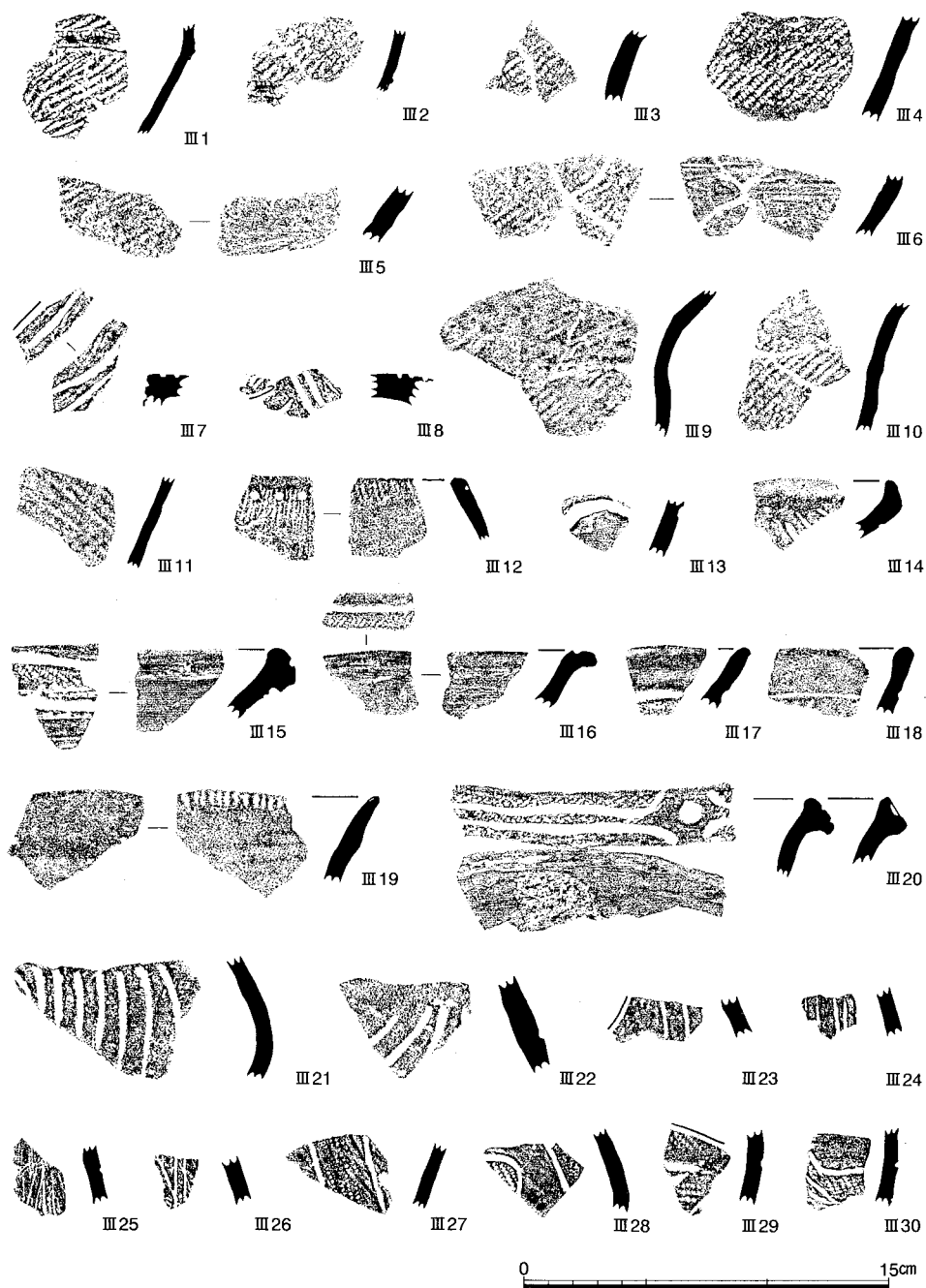


図76 青灰色シルト出土土器 (Ⅲ 1～Ⅲ 6 縄文前期), 黄灰色シルト出土土器 (Ⅲ 7・Ⅲ 8 縄文中期), 不定形土坑出土土器 (Ⅲ 9～Ⅲ 11 縄文前期, Ⅲ 12・Ⅲ 13 縄文中期, Ⅲ 14～Ⅲ 30 縄文後期) 縮尺1/3

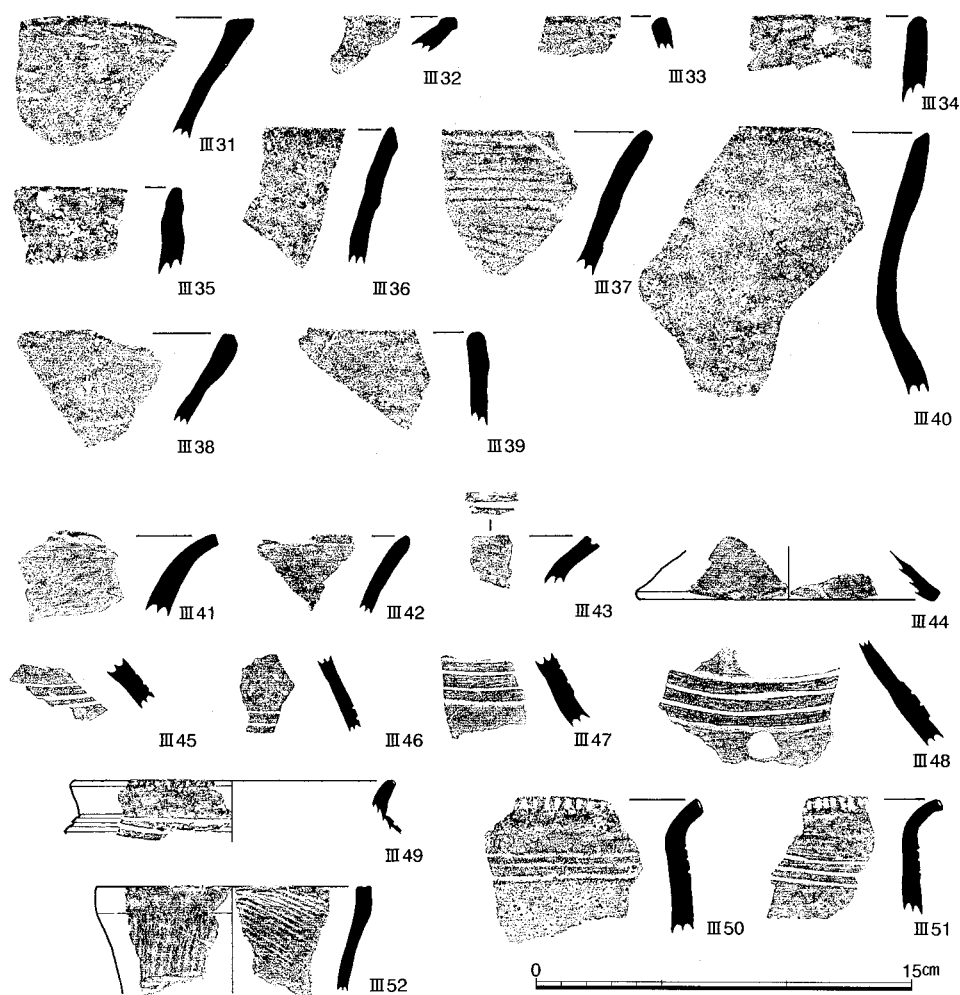


図77 不定形土坑出土土器（Ⅲ31～Ⅲ40縄文後期，Ⅲ41～Ⅲ51弥生前期，Ⅲ52弥生中期） 縮尺1/3

以降のものであることから、この測定結果との間に矛盾が生じることとなる。この矛盾を解消しうる説明としては、シルトの堆積状況の地点差、二次堆積などが考えられるが、いずれも現在のところ確証は得られていない。

縄文後期の土器（Ⅲ14～Ⅲ40） すべて不定形土坑埋土からの出土である。Ⅲ14～Ⅲ20は有文の口縁部。Ⅲ14は肥厚した口縁の外側に面取りを施し、その下には3本の沈線が確認できる。Ⅲ15は肥厚させた口縁部の上下に沈線をめぐらせ、その間を縄文で埋めている。福田K2式。Ⅲ17・Ⅲ18は口縁と平行に沈線をめぐらす浅鉢の口縁部である。Ⅲ19は口縁端部内側に刻みを施す。Ⅲ20は口縁を肥厚させ、円形押圧を施す主文様部と、2本沈

線と縄文からなる従文様部とから構成されている。縄文は中段にRL, 上段と中段の一部にLRが施されている。Ⅲ21～Ⅲ30は胴部の破片。Ⅲ21～Ⅲ24は縦方向に沈線を施し, Ⅲ25・Ⅲ26は半截竹管状の原体による条線を施す。Ⅲ27～Ⅲ30はいわゆる磨消縄文を施すもので, Ⅲ30の縄文はLR, それ以外はRLである。以上はすべて北白川上層式である。Ⅲ31～Ⅲ40は無文の口縁部。Ⅲ31は口縁端部内側を肥厚させ, 上面に面取りを施している。広瀬土坑40段階。Ⅲ37は二枚貝条痕による調整が施される。Ⅲ32～Ⅲ40は後期前葉のものとしてとらえられる。

弥生前期の土器 (Ⅲ41～Ⅲ51) すべて不定形土坑埋土からの出土。Ⅲ41～Ⅲ43は壺の口縁部。Ⅲ43は口縁端部に篋描沈線を施している。Ⅲ44は壺の蓋。笠形の器形で, 内外面を丁寧に篋磨きしている。Ⅲ45～Ⅲ48は壺の胴部。Ⅲ45・Ⅲ46は沈線を施す破片。Ⅲ47・Ⅲ48は削出し突帯上に2条の沈線を巡らす。Ⅲ49は短く外反する口縁部をもつ破片で, 頸部に3条の沈線が確認でき, 口唇部に刻み目を施す。器形は鉢あるいは短頸壺の様相を呈するが, 甕と同様の装飾を施す特異な資料である。Ⅲ50・Ⅲ51は甕の口縁。頸部に3条の沈線をめぐらし, 口縁端部に刻み目を施す。以上は前期中段階にまとまる内容のものである。

弥生中期の土器 (Ⅲ52) 不定形土坑埋土から直口壺の口縁 (Ⅲ52) が1点出土している。口縁端部は帯状に肥厚し, 横撫でにより端面は凹線状にくぼむ。外面は主に縦位, 内面は斜位方向に刷毛調整される。第Ⅳ様式。

(3) 木材の樹種鑑定 (図版39・40, 表7)

今回取り上げられた木材のうち32点につき, 樹種の同定をおこなった。定法にしたがい, 安全カミソリで三断面の切片を切り出し, 顕微鏡用標本を作製し, 通常の光学顕微鏡で観察ならびに写真撮影をおこなった。

樹種同定の拠点

カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) : 樹脂道や樹脂細胞を欠く。仮道管に対になったらせん肥厚がみられる。

アカガシ亜属 (*Quercus* spp. *Cyclobalanopsis*) : 大きさが中庸の, 厚壁の道管が放射方向にならぶ。放射組織は広放射組織と単列放射組織からなる。

ムクノキ (*Aphananthe aspera* Planchon) : 大きさが中庸の道管が散在する。軸方向柔組織は連合翼状ないし帯状となって接線方向に連なる。放射組織は1～6列で異性。

ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) : 環孔材で年輪始めの道管は大きい。道管内にチロースが詰まる。小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で, 1～6列。

ツバキ (*Camellia japonica* L.) : 散孔材。小さい道管が多数散在するが年輪始めで道管はやや大きい。道管は階段せん孔を有する。放射組織に大型の直立細胞が存在し、内部に結晶を含む。

ツルウメモドキ? (*Celastrus orbiculatus* Thunb.) : 環孔材。年輪幅は狭く、ときにチロースを含む大型の管孔が年輪を占める。小道管が集団をなして見られ、小道管にらせん肥厚が存在する。放射組織は1-7列。

ウリカエデ (*Acer crataegifolium* Sieb. et Zucc.) : 散孔材。木口面で木繊維がカエデ属特有の雲紋状を呈する。道管は単せん孔で、内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で1-3列。

カエデ属 (*Acer* spp.) : 散孔材。木口面で木繊維がカエデ属特有の雲紋状を呈する。道管は単せん孔で、内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で1-5列。

環孔材 : 大型の道管が孔圏を形成する。晩材部に向かって道管の径は減少する。道管はほぼ単独で分布し、単せん孔を有する。放射組織は1-6列で高さはきわめて高い場合がある。

散孔材A : やや疎らに散在する。道管は単せん孔を有し、らせん肥厚がみられる。放射組織は異性で、1-4列。

散孔材B : 道管は完全に変形しているが、散在する。放射組織は1-2列。

広葉樹材 : 厚壁の道管が一部みられるが、何面に相当するのかも特定できない。

樹種同定の結果は表7に示す通りである。この表から読み取れるように、ウリカエデも含めてカエデ属が15点と全体の約半数を占める。次いで、ムクノキとツルウメモドキ(?)が3点ずつで、ツバキ、ヤマグワ、アカガシ亜属、ムクロジなど京都近辺の山野に普通にみられる樹種が出土している。なお、針葉樹ではカヤが一点みられている。

表7 出土木材の樹種

| 試料 | 登録番号 | 樹種 | 試料 | 登録番号 | 樹種 | 試料 | 登録番号 | 樹種 |
|----|------|------------|----|------|------------|----|------|------|
| 1 | P9 | 広葉樹 | 12 | P71 | カエデ属 | 23 | P117 | ムクノキ |
| 2 | P10 | アカガシ亜属 | 13 | P77 | ムクロジ | 24 | P119 | カエデ属 |
| 3 | P23 | フジキ | 14 | P78 | ムクノキ | 25 | P120 | カエデ属 |
| 4 | P24 | カエデ属 | 15 | P86 | ツルウメモドキ(?) | 26 | P121 | カエデ属 |
| 5 | P30 | カエデ属 | 16 | P87 | カエデ属 | 27 | P182 | カエデ属 |
| 6 | P32 | 環孔材 | 17 | P97 | カヤ | 28 | P183 | ムクノキ |
| 7 | P45 | ツルウメモドキ(?) | 18 | P98 | カエデ属 | 29 | P212 | ツバキ |
| 8 | P50 | ウリカエデ | 19 | P100 | 散孔材B | 30 | P213 | ツバキ |
| 9 | P64 | 散孔材A | 20 | P101 | カエデ属 | 31 | P219 | カエデ属 |
| 10 | P67 | ヤマグワ | 21 | P102 | カエデ属 | 32 | P221 | カエデ属 |
| 11 | P68 | カエデ属 | 22 | P115 | ツルウメモドキ(?) | | | |

※出土層位はすべて暗褐色粘質土 (縄文時代前期以前)

4 中世の遺跡

(1) 中世の遺構（図版38，図78）

中世の遺構は、土取り跡とみられる不定形土坑からなっている。採取の対象になったのは黄灰色シルトや青灰色シルトであり、土取りがおこなわれる以前には、それらのシルト層の上に、古代に形成された黒褐色土や中世前半の遺物を含む茶褐色土などの土層がほぼ水平に堆積していたと考えられる。これらの土層はほぼ調査区全域において土取りのために掘削され、不定形土坑の埋土となっている。また、道路の路面の破碎されたものが、調査区北辺の不定形土坑の埋土中に含まれていた。後述のように近世の道路が調査区の北辺を西南西から東北東にむかってのびていたと推定されるが、中世においてもほぼこれに対応する路面があったことも推定できる。不定形土坑の単位は総計74個ほどを数える。その大きさや形態をみると、たとえば調査区中央部に南北約4 m東西約1.5 m程度のものが5個隣接しており、これらは一連の掘削によって残された痕跡である可能性もある。しかし、全体としては大きさや形態に統一的な規格があったとは考えられない。

掘削の順序について、埋土が単一の土で構成されているものはほとんどないため、平面的な切り合い関係の認定は困難であった。そこで層位断面をみると、不定形土坑の埋土をいくつかに分層できる（図73）。その埋積の状況は、西から東、南から北に傾斜して不定形土坑を埋めている傾向が高い。南に隣接する143地点でも同じ傾向がみられ、埋め戻し作業が、西から東、南から北へとおこなわれたことを示している。ただし、図73の南北畔（Y=2030.5）のX=1284以北にみられるように、北から南へと埋積している場合もあり、定方向に作業がおこなわれたと断定できない。

南に隣接する134地点では、14世紀中葉ごろの井戸に切られている不定形土坑があり、不定形土坑が13世紀前葉ごろの木枠組井戸を完全に埋めていることなどから、その掘削が13世紀中葉～14世紀前葉ごろにおこなわれたものと考えた。しかし、今回の調査で検出した不定形土坑の埋土から出土した遺物を詳細に観察すると、13～14世紀の土師器や陶磁器が圧倒的多数をしめているが、14世紀後葉～15世紀前葉ごろと考えられる土師器が少量ながら埋土下層にしかもほぼ全域にわたって包含されていることが判明した。これから14世紀後葉～15世紀前葉ごろに、土取りが最も活発におこなわれていたとみたい。ただし、埋土の上層からは一部16～17世紀に属する遺物も少量ながら出土しており、そのころに部分的に土取りがおこなわれたことをまったく否定してしまうことはできない。

中世の遺跡

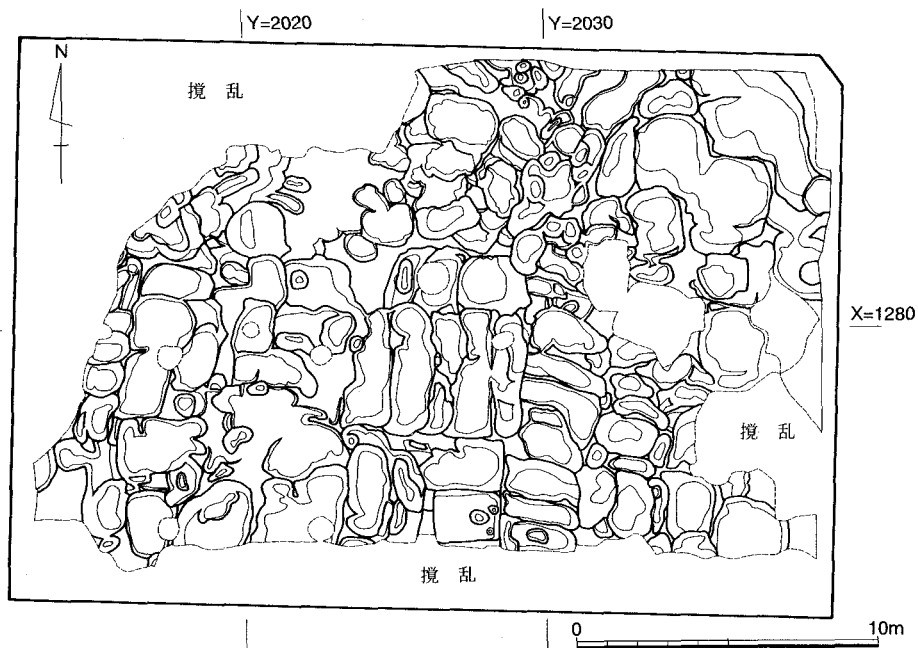


図78 中世の遺構 縮尺1/250

(2) 中世の遺物 (図79・80)

不定形土坑の埋土から出土した中世の土師器、瓦器、陶磁器類を図79と図80に示した。Ⅲ53～Ⅲ90は土師器。Ⅲ53～Ⅲ79は赤褐色、Ⅲ80～Ⅲ90は灰白色をそれぞれ呈する。大型の皿のうち、Ⅲ53は2段撫でつまみあげ手法C₄類、Ⅲ54・Ⅲ55は1段撫で面取り手法D₄類、Ⅲ56・Ⅲ57は1段撫で面取り手法D₅類、Ⅲ58・Ⅲ59は1段撫で面取り手法D₆類、Ⅲ60は1段撫で手法E₁類、Ⅲ61は1段撫で手法E₃類、Ⅲ62～Ⅲ64は1段撫で手法E₄類である。小型皿のうち、Ⅲ65・Ⅲ66はD₄類、Ⅲ67はD₅類、Ⅲ68～Ⅲ73はE₁類、Ⅲ74～Ⅲ76はE₃類、Ⅲ77～Ⅲ79はE₄類である。Ⅲ80は小型碗。丸い器形が特徴である。Ⅲ81～Ⅲ85は大型碗。ともに1段撫で手法E₁類。Ⅲ86はF₂類。Ⅲ87～Ⅲ90は小型碗。Ⅲ87・Ⅲ90は口縁端部に面取りがあり、Ⅲ88・Ⅲ89は凹み底をなす。

Ⅲ91は瓦器小杯。篋状工具で口縁を5輪花に形成し内面を篋磨きする。内底部には斜格子の暗文を施す。Ⅲ92は白磁玉縁付碗。Ⅲ93・Ⅲ94は同趣の青磁皿。Ⅲ94の底部には劃花文を施す。同安窯系の製品である。Ⅲ95・Ⅲ96は褐釉陶器壺の口縁部と底部。口縁は玉縁状をなす。Ⅲ97は瀬戸・美濃産の皿。内面は菊花状をなし黄緑色の釉がかかる。Ⅲ98は天目碗。Ⅲ99は青磁碗。口縁はゆるやかに外反する。Ⅲ100は卸皿。Ⅲ101は志野皿。Ⅲ102

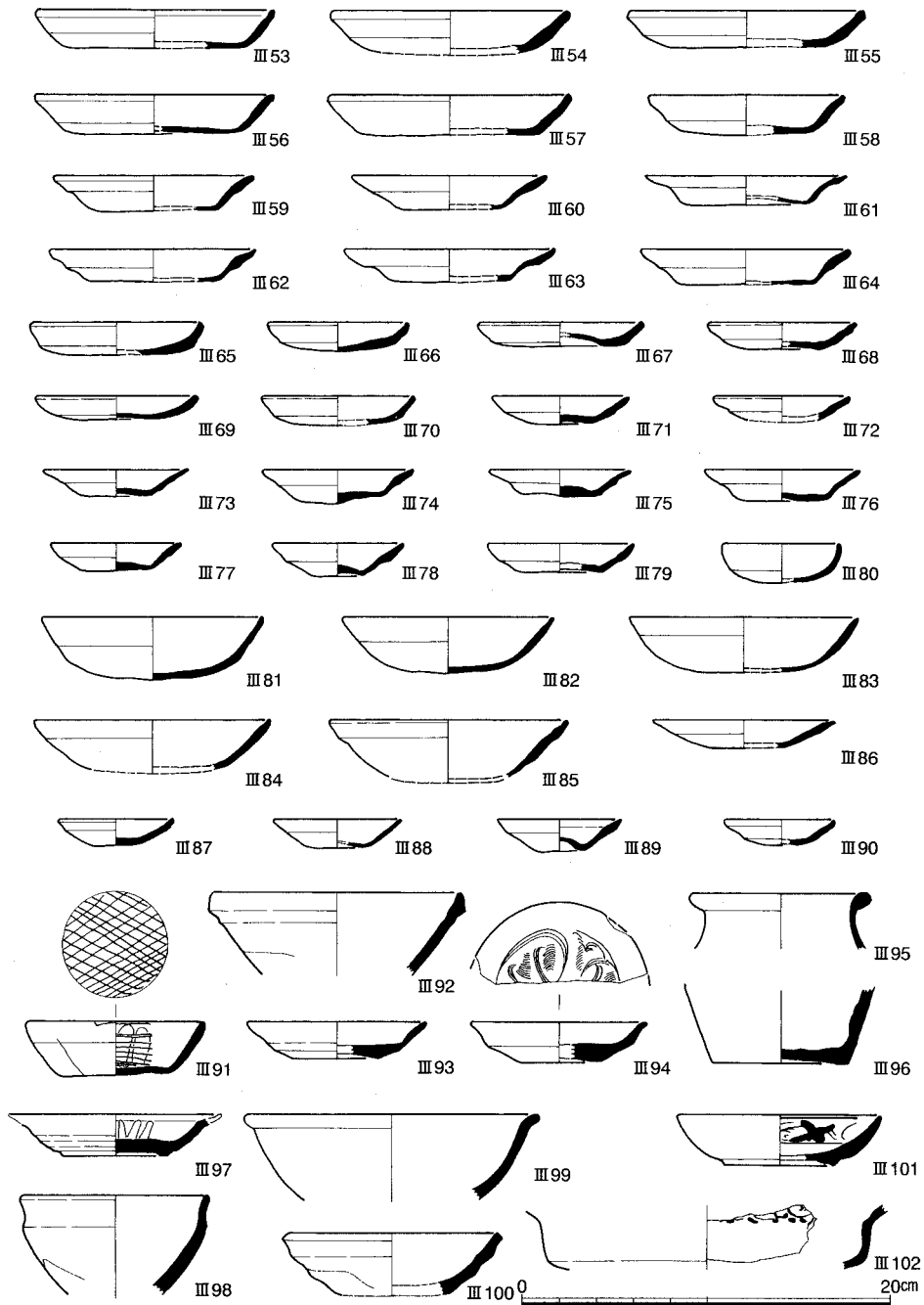


図79 不定形土坑出土遺物(1) (Ⅲ53～Ⅲ90土師器, Ⅲ91瓦器, Ⅲ92白磁, Ⅲ93・Ⅲ94・Ⅲ99青磁, Ⅲ95・Ⅲ96褐釉陶器, Ⅲ97瀬戸・美濃, Ⅲ98天目, Ⅲ100瀬戸, Ⅲ101志野, Ⅲ102唐津)

中世の遺跡

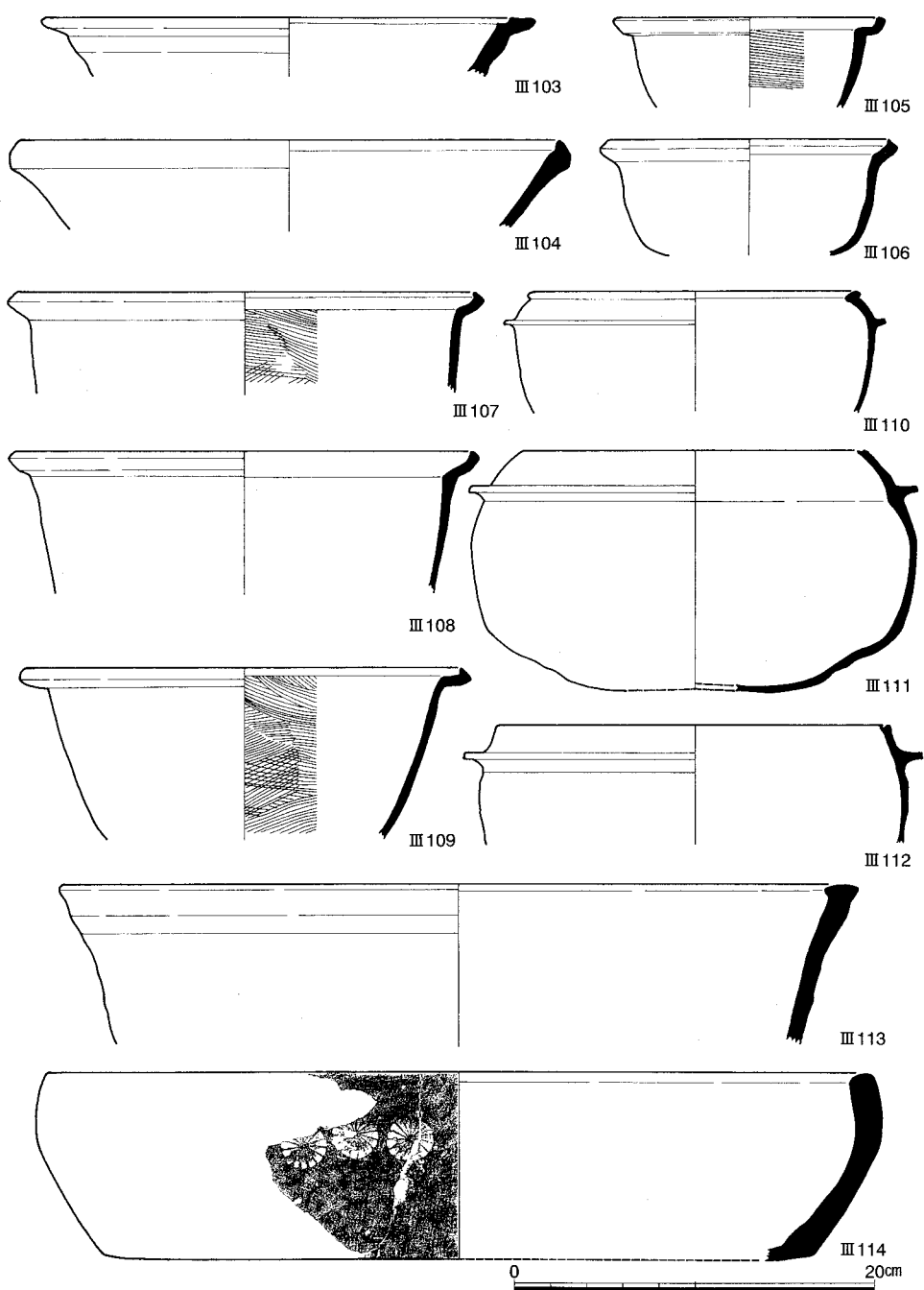


図80 不定形土坑出土遺物(2) (Ⅲ103灰釉系陶器, Ⅲ104須恵器, Ⅲ105～Ⅲ114瓦器)

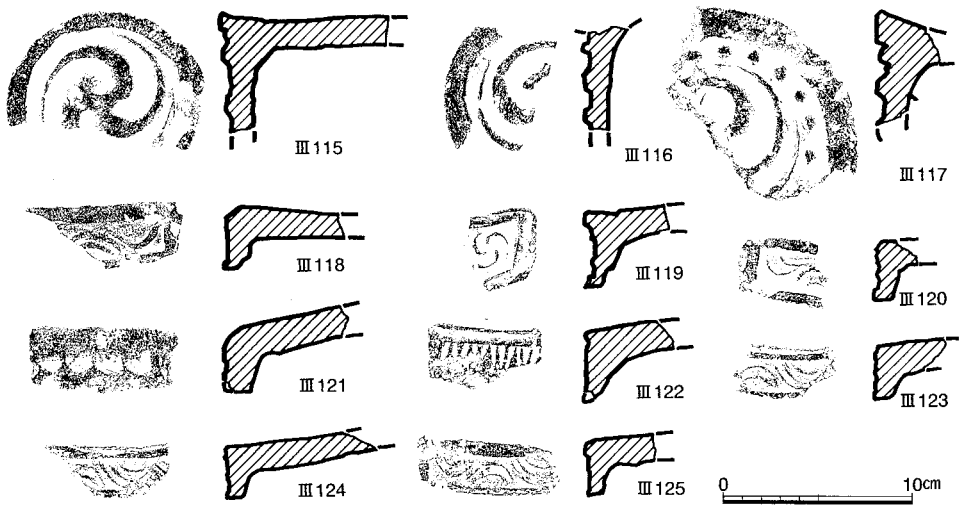


図81 軒丸瓦（Ⅲ115・Ⅲ116不定形土坑，Ⅲ117SE8），軒平瓦（Ⅲ118～Ⅲ125不定形土坑）

は唐津碗。鼠地に黒釉で蔓草を描く。

Ⅲ103は灰釉系陶器の鉢。口縁部内面に段差がある。Ⅲ104は東播系の須恵器すり鉢。口縁は上下に拡張している。Ⅲ105～Ⅲ114は瓦器。器壁が摩滅して調整などの見分けのつかないものが多い。Ⅲ105～Ⅲ109は鍋。Ⅲ105は口縁が丸く屈曲する。Ⅲ106～Ⅲ108は口縁の屈曲があまくなってきている。Ⅲ109は口縁の屈曲が少なく，口縁端部に突出を作って鍋蓋受けとしている。Ⅲ110～Ⅲ112は羽釜。Ⅲ110・Ⅲ111は肩部から口縁にかけての傾斜が著しく，Ⅲ111は体部も丸い形態を示す。ともに中世でも早い時期のもの。Ⅲ112は口縁部が直立している。Ⅲ113は盤。口縁端部が内外に突出し，外面には粘土紐による凹凸が残る。Ⅲ114は火鉢。15弁の菊花のスタンプを外面部に押ししている。器壁は厚い。

図81に中世の軒瓦を示す。12世紀から15世紀ごろのものである。いずれも不定形土坑や近世の遺構から出土しており，葺かれていた建物遺構は検出していないが，調査区の西北部周辺に多い傾向がみとめられる。Ⅲ115～Ⅲ117は軒丸瓦。ともに巴文ながら，Ⅲ115とⅢ117は左回り，Ⅲ116は右回り。Ⅲ117は巴の周囲に珠文を巡らす。Ⅲ118～Ⅲ125は軒平瓦。Ⅲ118・Ⅲ120は唐草文軒平瓦。Ⅲ119は連巴文軒平瓦。Ⅲ121・Ⅲ122は剣頭文軒平瓦。Ⅲ122は細弁。Ⅲ123～Ⅲ125は波文軒平瓦。

以上のように，不定形土坑には13世紀前葉ごろから17世紀初頭ごろにいたる，かなり長い期間のものが含まれているが，16～17世紀のものは，ごく少量のものが狭い範囲から出土しており，土取りが最も活発におこなわれたのは，15世紀を中心とするところであろう。

5 近世の遺跡

(1) 近世の遺構 (図82・83)

近世の遺構は、基本的に畑地の耕作に関するものであり、野壺SE1～SE7と井戸SE8のほか柱穴や溝、石列を検出した。

野壺SE1・SE5は漆喰製の杵をもつもので、下半が完存していたSE1の杵の直径は約1.5mである。SE2・SE6は、円形の木杵があったものとみられる。SE3は調査区の端にかかり、またSE4やSE7は他の野壺に切られており、それらの構造は明らかではない。検出されたこれらの野壺は、東北東から西南西にむかう一直線にはほぼ連なることがわかる。本調査区の西約70mに位置するAN18区(143地点)では、東西にはしる近世の道路SF1を検出しており〔五十川・宮本88〕、このSF1を東に延長すると、ちょうど本調査区の野壺を結んだ線の北側付近にあたる。このことから、本調査区の北縁に近世の道路があったことはまちがいない。また、前述のように中世にもこれに対応する道路があったことも推定される。

また、井戸SE8と野壺SE5・SE6・SE7とは、糞尿を溜めて腐敗させ、適度に水と攪拌して施肥するという農作業に必要な一対の施設と考えることができる。こうした施設は耕地の単位の隅に設けられた可能性がある。このSE8の南側において南北方向の石列を検出しており、その下部で溝を検出した。これを畔にかかわる遺構とみれば上記の推定に符合する。このほか、土取り穴の埋土の上面には、近世の柱穴が散在していた。耕作や境界にかかわる柵列と推定されるが、その柱間や方向を確認できなかった。

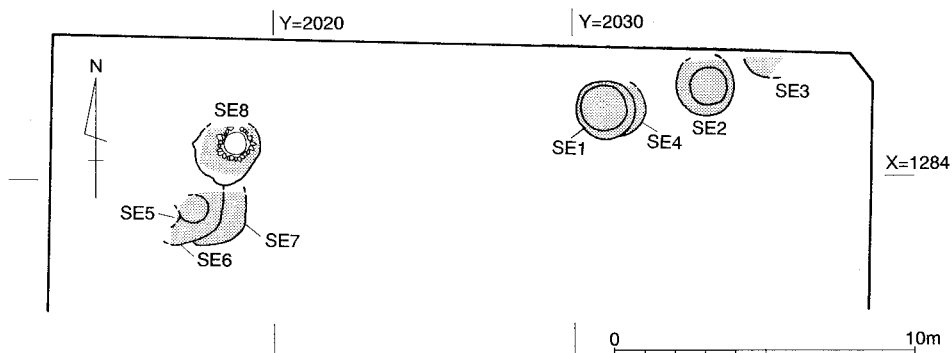


図82 近世の遺構 縮尺1/250

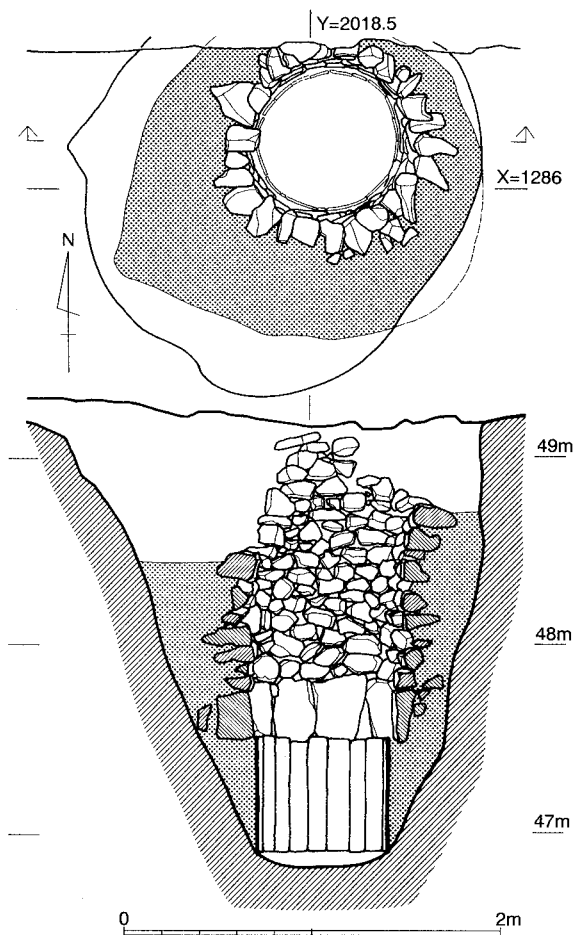


図83 井戸SE 8 縮尺1/40

下層の先史時代の遺物包含層を掘り下げる過程で、近世の終りごろの井戸SE 8を検出した。上部は攪乱によって徹底的に破壊されていたが、中位から底部にいたる石組や枡板部分が残存していた。

石組に使われた石材は花崗岩を主体としており、その表面は焼けこげと思われる黒い変色がみられた。小石による石組が、1.3mにわたって残り、その下には約30cmの大型の花崗岩を並べて、石組の基礎としていた。さらに、その下には長さ60cmの桶の枡板を並べた直径70cmの水溜をもうけており、底部は厚い赤褐色砂礫層に達していた。掘形は、検出面で約2mの不整円形であるが、下部にゆくにしたがって急激に縮小し、最下部では桶枡の端部に接していた。底部はややくぼんでいる。

(2) 近世の遺物 (図84)

野壺や井戸からは陶磁器を中心とする相当量の遺物が出土したが、細片が多く図化しうるものは少ない。図84に野壺SE 7・SE 1と柱穴埋土から出土した遺物を示した。

Ⅲ126・Ⅲ127はSE 7出土遺物。ともに断面がV字形の圈線をもつ土師器皿。焼成があまく、表面が摩耗している。

Ⅲ128～Ⅲ135はSE 1出土遺物。Ⅲ128～Ⅲ133は陶器。Ⅲ128～Ⅲ130は灯明皿。外面は露胎、内面に淡緑色の釉を施す。Ⅲ131・Ⅲ132は垂下するかえりをもつ蓋。Ⅲ131は無釉で赤褐色を呈する。Ⅲ132は口縁部より上に淡黄色の釉を施す。Ⅲ134・Ⅲ135は染付碗。ともに内面に2本一組の圈線を2対、外面に花文を描く。

近世の遺跡

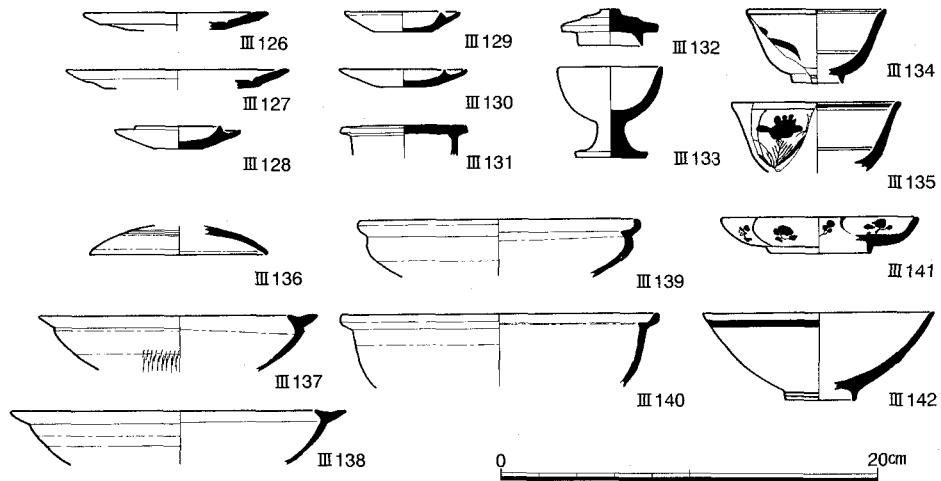


図84 SE 7出土遺物（Ⅲ126・Ⅲ127土師器），SE 1出土遺物（Ⅲ128～Ⅲ133陶器，Ⅲ134・Ⅲ135染付），柱穴出土遺物（Ⅲ136～Ⅲ140陶器，Ⅲ141・Ⅲ142染付）

Ⅲ136～Ⅲ142は柱穴出土遺物。Ⅲ136～Ⅲ140は陶器。Ⅲ136は蓋。Ⅲ137・Ⅲ138は鍋。口縁部は内外に突出する。Ⅲ137は内外ともに赤褐色，Ⅲ138は暗緑色の釉を施す。Ⅲ139・Ⅲ140は行平鍋。口縁は丸く屈曲し蓋を受ける。Ⅲ139・Ⅲ140ともに灰白色の釉を施す。Ⅲ141・Ⅲ142は染付。Ⅲ141は皿。Ⅲ142は椀。口縁の外周に簡素な圈線を描くのみである。これらは近世後半，19世紀ごろの資料とみられる。

6 小 結

以上のような遺構の状況から，これまでの周辺の調査成果も勘案して，この遺跡地の歴史的景観の変遷について述べる。

先史時代の地形 先史時代に形成されたとみられる黄灰色シルト以下の堆積層をみると，調査区一帯は，広く吉田山周辺地域におよぶ洪水や小河川の流入にさらされる不安定な土地であった。縄文前期以前のある段階において，一時的ながら小河川が流れこむ安定した時期があり，湿気の多い河川の縁辺に森林が形成されたものとみてよい。本調査区の堆積層にふくまれている土器は，摩滅の著しいものが多く，使用・廃棄された場所から小河川や洪水によって運ばれて，この地に堆積したと推定できる。これらの土器の使用された当時の集落の中心地は，流路の方向からみて北東にあたる地であろう。

中世の土取り 土取りの遺構は，北側のAP19区（74地点）や南側のAL20区（169地点）でもほぼ調査区全体にわたって確認しており〔清水・吉野81，浜崎90〕，医学部構

内東半の広い地域が集中的な土砂の採取地として継続的に機能していたことが判明している。前述のように、その掘削の時期については確定が困難な場合が多いのであるが、少なくとも14世紀以降17世紀初頭ごろにおよぶものであることはまちがいない。これらの中世の土取り穴は掘形が不整形をしており、近世の方形のものと異なっている。これについては、中世における年貢を納めて土を採取する方式と近世の採取した土量に応じて代価を支払う方式との違いによるものではないかと推定する〔五十川91〕。

近世の耕地 野壺や井戸の配置から、攪乱によって破壊された近世道路遺構を復原した。こうした道路南面に連なる野壺群は、本部構内A W28区（57地点）・A X28区（90地点）・A W27区（181地点）などにおいても検出されている〔岡田・吉野80，五十川83，五十川ほか92〕。この道路はさらに東に延長すれば、本学総合人間学部構内における吉田二本松町と吉田近衛町の字境界線にも重なってくるものであり、近世の地割線として重要なものであったことがわかる。表土や攪乱層の厚い場合にはこうした道路遺構はまず残存しないが、掘形の深い野壺や井戸の遺構は検出されることが多い。近世の地割を推定するために、こうした遺構の存在意義は大きい。また、こうして復原される近世の字境が、中世の土地境界を踏襲したものであることが実に多いことにも注目したい。